大会報告

ジュニア世界選手権 2003 報告

明日の日本のエースたち、エストニアを走る

団長 尾上秀雄

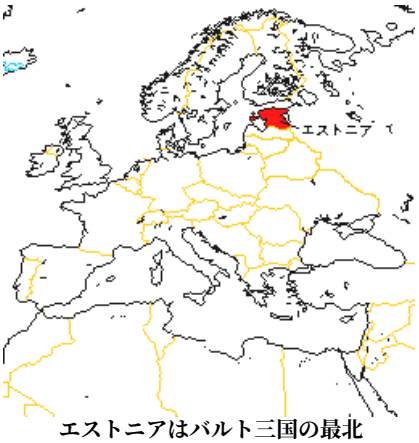
今年のジュニア世界選手権（JWOC）はバルト３国の最も北に位置するエストニアのプルバ市で７月７日～12 日に開催された。日本からは、男女各６名の代表選手とオフィシャル３名の計 15 名が参加し、35 ヶ国、300 名の選手を相手に戦った。

<日本代表選手団>
男子選手：
　後藤大輔、保呂毅、坂本貴史
　高橋雄哉、山田高志、山崎貴彦
女子選手：
　阿久津麻美、千葉光絵、原直子
　朴峠周子、下村佳奈、築山絢
オフィシャル：
　尾上秀雄、高橋善徳、高橋ひろみ

オフィシャル HP に載った坂本の勇姿

1．大会までの準備

オリエンテーリングを始めて間もない選手が海外の選手権大会でいきなり好成績を修めることはむずかしい。むしろ自分が準備してきたことがどこまで通用するか、ひとつの挑戦の場と捉えた方が自然である。そのためには準備の量と質が問題になるが、少しでも長い準備期間が取れるように昨年 12 月末には事前合宿を開催し JWOC を目指す選手に対する意識付けを行った。選考会後の 3 回の強化合宿では JWOC の OB、OG のみならず、継続的なフォローがしてもらえるように選手の身近な先輩やコーチなどにも手伝ってもらった。また今回は特にエストニアの地図データベースから地図が取り出せたので、競技エリアの旧地図を使った机上練習も行い、例年になく万全を期したはずだった。



エストニアはバルト三国の最北

2．トレキャン

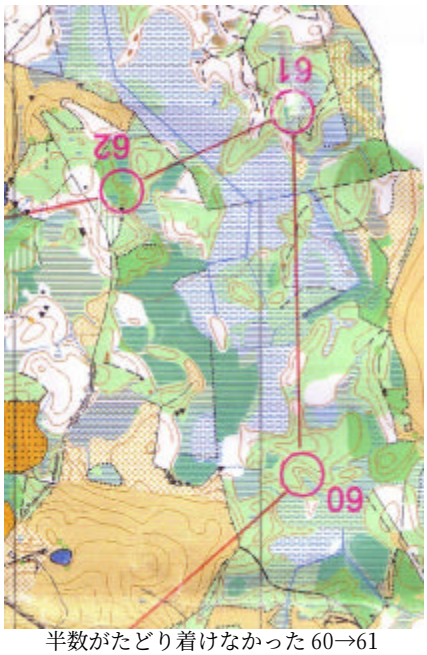
トレキャン初日は恐る恐るテレインに入るのではなく、それまで準備してきたことがどこまで通用するかを試すために、いきなりレース形式で走ってみることをここ数年行っている。その方が課題が早く見つかるからだ。

主催者が用意してくれた全ポ図を使って 3㎞ 程度のコースを善徳コーチに組んでもらって選手に走らせたのだが、帰ってきた選手の顔が冴えない。聞いてみると１番しか行けなかったというのだ。それが一人ではなく三人、四人と・・・　男女とも半数が１番のみという結果になった。「私は本当に代表としてここにいて良いのでしょうか？」と半泣きになる選手も現れ、暗雲が立ち込めた。

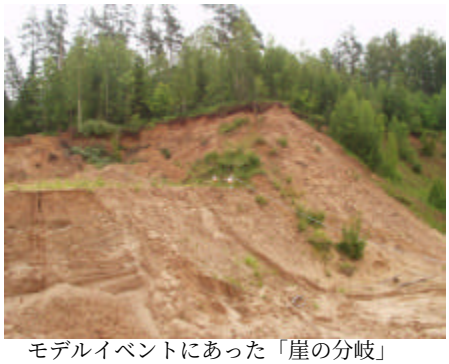
早々に宿に帰って選手と反省会。湿地は通れない、通りたくないという意識がプランを難しくして失敗した選手が多いことが分かった。おまけにやぶの掛かった見通しの良くないところでの方向維持は、今まで経験したことがなく困難を極めたらしい。

課題が明確になったところで 5 時からその日 2 回目のテレインに入る。今年のトレキャンはお昼と夕方の 2 回の練習が主催者側で準備されているのだ。夜10時頃まで明るいこの地方ならではのセッティングだ。夕方の練習ではラインがそれなりに使えるコースだったこともあり、各選手ともまずまずのタイムで帰ってきた。少し自信を取り戻すことができた。

その後は疲れをためないように 1 日 1 回のメニューで調整したが、いずれも主催者の設定は 2 時間の練習枠だけだったので復習する時間が取れずに不消化な部分も残ってしまった。



半数がたどり着けなかった 60→61



モデルイベントにあった「崖の分岐」

3. ショート競技予選

＜女子＞

氏　名	組／順位	タイム	トップ比	コース
E. SAUE	1- 1	0:23:13	100%	3200m
A決勝ボーダー	1-20	0:29:29	127%	
B決勝ボーダー	1-40	0:48:50	210%	45名
原　直子	1-43	0:55:45	240%	
築山　絢	1-44	0:57:18	247%	
A. RIHMA	2- 1	0:24:29	100%	3200m
A決勝ボーダー	2-20	0:30:54	126%	
B決勝ボーダー	2-40	0:53:31	219%	45名
朴峠周子	2-44	1:14:45	305%	
阿久津麻美	2-45	1:33:05	380%	
E. GRIGAITE	3- 1	0:23:06	100%	3200m
A決勝ボーダー	3-20	0:28:31	123%	
下村佳奈	3-39	0:42:07	182%	44名
B決勝ボーダー	3-40	0:42:54	186%	
千葉光絵	3-41	0:43:18	187%	

＜男子＞

氏　名	組／順位	タイム	トップ比	コース
E. LAUR	1- 1	0:21:18	100%	3800m
A決勝ボーダー	1-20	0:24:04	113%	
山田高志	1-40	0:31:25	147%	56名
B決勝ボーダー	1-40	0:31:25	147%	
保呂　毅	1-51	0:39:05	183%	
A. WELTZIEN	2- 1	0:20:54	100%	3800m
A決勝ボーダー	2-20	0:23:54	114%	
B決勝ボーダー	2-40	0:29:16	140%	55名
山崎貴彦	2-46	0:32:46	157%	
坂本貴史	2-48	0:38:11	183%	
D. HUBMAN	3- 1	0:21:36	100%	3800m
A決勝ボーダー	3-20	0:24:11	112%	
B決勝ボーダー	3-40	0:31:03	144%	55名
後藤大輔	3-44	0:37:31	174%	
高橋雄哉	3-51	0:51:55	240%	

今年は男子で３回目出場の山田がちょうどボーダー順位で B ファイナル進出を果たした。3800m を 31:25 のキロ 8 分ちょっとの良い走りではあるがトップから比べると 147%になる。トップはキロ 5 分半という恐るべきスピードなのだ。女子は下村だけが B ファイナル通過の順位だったが C ファイナルの人数が少ないため全員が B ファイナルを走れることになった。

オフ日にデンマークチームと 400m トラックで 12 人リレー競争

七夕では一緒に願いごとを書いた外国選手も

4. ショート競技決勝

＜女子＞

氏　名	順位	タイム	トップ比	コース
Laura HOKKA	A- 1	0:25:09	100%	3700m
				140m
Seline STALDER	B- 1	0:25:32	100%	3600m
下村佳奈	B-48	0:41:02	161%	140m
原　直子	B-52	0:45:49	179%	
千葉光絵	B-54	0:45:57	180%	
築山　絢	B-62	0:58:35	229%	
朴峠周子	B-65	1:13:19	287%	
阿久津麻美	B-66	1:42:58	403%	

＜男子＞

氏　名	順位	タイム	トップ比	コース
Matthias MERZ	A- 1	0:24:35	100%	4500m
				180m
Graham GRISTWOO	B- 1	0:24:48	100%	4000m
山田高志	B-43	0:32:58	133%	160m
Scott FRASER	C- 1	0:24:53	100%	3800m
坂本貴史	C- 7	0:29:36	119%	150m
山崎貴彦	C-11	0:31:29	127%	
後藤大輔	C-29	0:38:44	156%	
保呂　毅	C-33	0:47:07	189%	
高橋雄哉	mp			

決勝はコースもやや簡単だったこともあって、それなりに走れる選手も増えて次第に硬さも取れてきた。高橋の mp は差し込みが不十分だったためかラスポの記録が SI カードに残っていなかったためである。

ショート優勝、スイスの Matthias Merz（中央）はクラシックでも 2 位と大活躍

レースが終わったら仲良く記念撮影（朴峠）

5. クラシック競技

＜女子＞

氏　名	順位	タイム	トップ比	コース
M. DOCKALOVA	1	0:55:36	100%	7900m
A. FINCKE	2	0:55:43	100%	280m
H. JANSSON	3	0:56:49	102%	
下村佳奈	115	1:52:17	202%	
千葉光絵	119	1:56:47	210%	
朴峠周子	122	2:08:55	232%	
原　直子	123	2:08:59	232%	
築山　絢	DNF			
阿久津麻美	DQ			

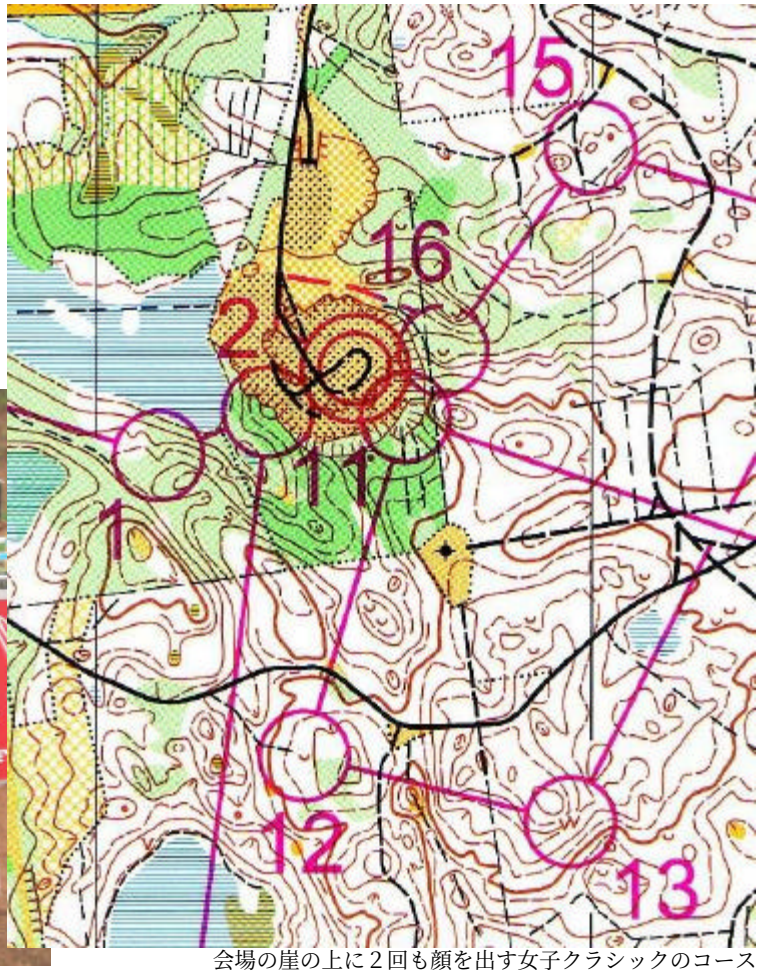
＜男子＞

氏　名	順位	タイム	トップ比	コース
D. TSVETKOV	1	1:04:00	100%	11900m
M. MERZ	2	1:04:55	101%	430m
D. HUBMANN	3	1:05:55	103%	
山田高志	121	1:37:17	152%	
坂本貴史	138	1:52:42	176%	
保呂　毅	142	1:54:09	178%	
山崎貴彦	148	2:05:47	197%	
高橋雄哉	149	2:09:05	202%	
後藤大輔	150	2:09:08	202%	

クラシックは距離も長くフィジカル的な強さが要求されると共に、ルート選択でもバリエーションの多いコース設定だった。男女とも会場から見えるコントロールを 2 回通過するように作られており、演出的にも工夫が見られた。日本選手は男女とも 2 時間レースになり女子では 2 名が完走できなかった。

一方、世界のトップは男子がキロ 5 分半、女子でも 7 分で走ってしまう。2 位以下も秒差で続くのが現実だ。男子ショートで優勝したスイスの Matthias Merz は 55 秒差で 2 位となり 2 冠はならなかったが、今大会でもっとも活躍した選手の一人だろう。

クラシックを走り終わって安堵の高橋と下村



会場の崖の上に 2 回も顔を出す女子クラシックのコース

日本選手団全員集合

6. リレー競技

＜女子＞　27ヶ国 44チーム

氏　名	国順位	タイム計	タイム	トップ比
Finland	1	1:42:14		100%
1走　5.6-5.7km			0:39:34	
2走　3.9km			0:25:17	
3走　5.6-5.7km			0:37:04	
Sweden	2	1:42:44		100%
Norway	3	1:46:09		104%
日本A	24	2:49:45		166%
下村佳奈			1:03:16	160%
朴峠周子			0:42:48	169%
原　直子			1:03:41	172%
日本B		3:18:05		194%
千葉光絵			1:15:13	190%
築山　絢			0:47:24	187%
阿久津麻美			1:15:28	204%

＜男子＞　31ヶ国 57チーム

氏　名	国順位	タイム計	タイム	トップ比
Russia	1	1:56:37		100%
1走　7.9-8.0km			0:42:44	
2走　6.0km			0:32:35	
3走　7.9-8.0km			0:41:18	
Norway	2	1:58:01		101%
Switzerland	3	1:58:30		102%
日本A	27	2:53:38		149%
山田高志			0:52:56	124%
山崎貴彦			0:45:38	140%
坂本貫史			1:15:04	182%
日本B		3:11:00		164%
保呂　毅			1:05:14	153%
後藤大輔			0:50:08	154%
高橋雄哉			1:15:38	183%

今年のリレーは走順によって距離が異なった。そのためチーム分けと走順の決定には少なからず苦慮したが、選手の特性に合わせて走順が選べるなどの自由度が増したとも言える。最終的に決定したチームは期待できるものだった。実際、特に男子Aチームは1走でトップから10分差で快走した山田を、山崎が好タイムでつなぎ、久しぶりに他国と競り合える展開が楽しめた。最終的には3走で不本意なミスが出たために平凡なタイムに終わったが、過去最高のトップ比 140%を切る可能性を十分感じさせてくれる結果だった。今後のひとつの目標になる数値だろう。

女子のトップ争いで驚くべきことがおこった。ショート1位とクラシック 2 位の選手を抱えて優勝候補筆頭だったフィンランド女子が1走で3分出遅れ、順位を上げたものの 8 位に終わってしまう。ところがなんと同じフィンランドの第2チームが、2走の頑張りでトップ集団に入ったかと思うと 3 走が競り合いを制して逃げ勝ってしまった。3位まで 20 秒という僅差だったが、選手層の厚さをいまさらながら思い知らされた瞬間だった。

出走前のリレー男子Aチーム（左から山田、山崎、坂本）

男子リレーで優勝したロシアチームのウイニングラン

7．反省

全体を通じて今年は準備してきた割には結果が伴わなかった。むしろ最後までテレインへの対応に苦労する選手がいたのが現状だ。その原因を決め付けることはできないがいくつかの要素・課題を挙げてみる。

・コンパスの針が止まりにくいこと

高緯度のために日本より明らかに針の止まりが遅い。そのために方向維持で苦労した選手が多い。これは特にサムコンを使用していた選手に顕著だった。日本では多少方向精度が悪くても明確な地形や特徴物で修正できるので表面化しなかったものが手掛かりの少ない現地のテレインで露呈してしまったといえる。

・湿地・やぶへの対応

日本で地図を手に入れたときから気になっていたのが湿地である。十分に地図読み練習もして対策を練ってきたつもりだったが、見たこともないものに対して想像を膨らませすぎたことの弊害も出てきたようだ。地図では青色のハッチで大変目立つため、現地でもはっきり目立つものだと思い込んだり、できるだけ通らないプランを優先させたりしたために対応が遅れた。実際は水のあるもの、乾いたもの、境い目のはっきりしないものなど様々であり、これにやぶの掛かったものは見通しも悪くさらに困難を極めた。

・点をつなぐナビゲーション

日本では道や植生界、尾根、沢、傾斜変換など線状特徴物には事欠かないので、どうしてもそれらをつないで進むナビゲーションが中心となる。エストニアのテレインは2.5mコンターの割には地形もあるのだが、やはり限られた面積の特徴物を点でつなぐナビゲーションが必要とされる。この部分に関してはまだまだ練習が必要で、他人の踏み跡に影響されたり、不明瞭な小径を何とか辿ろうとして失敗した選手が多かった。

来年も類似したテレインが予想されるのでこれらのことを念頭においた準備が必要だろう。

浴衣姿はいつももてもて、格好のフォトジェニック）

8．さいごに

今年は成績としては良くなかった。しかし全員がそれなりの準備をして臨んだ大会だったので、この経験でつかんだものは多かったはずだ。すべては「事実を受け止める」ことから始まる。

・失敗して初めてそれが分かる選手
・失敗してもなかなかそれが分からない選手
・失敗しなくてもそれを予感できる選手

とさまざまだろうが、この事実を正しく受け止めて自ら解決の糸口を見出せる選手が強くなる選手だ。

今後、主催者側の技術的問題さえ解決すればJWOCでもスプリント競技を導入して行くことが決まった。特に若い選手にとって新しい可能性を広げる分野なので、是非多くの人に挑戦してもらいたい。

最後になりましたが、JWOC の選手たちの遠征に際しては OB、OG の方々を始め、本当に多くの人たちのご協力・ご支援を頂きました。この場を借りてお礼申し上げると共に、今後もこの選手たちの活躍を見守っていただければと思います。

（尾上秀雄）